
私の事を知らないあなたへ—津田志保視点

雨宮 だりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の事を知らないあなたへ―津田志保視点

【Nコード】

N3568H

【作者名】

雨宮 だりあ

【あらすじ】

砂漠の薔薇、企画作品です。入学早々、金髪のジェシーに一目惚れした志保。臆病な性格が災いして、会話することすら叶わない。他の方の視点を計算しきれず、勢いで書いてしまいました。スピードだけが取り柄です。みなさん申し訳ありませんorz

（前書き）

グループ企画、砂漠の薔薇、見つめる先に、で検索すると、他の方の作品と比較して読むことができます。

私は、海が好き。

緑のサンゴ礁の色も、深い日本海の紺色も、アドリア海のマリンブルーも、太平洋の能天気な水色も。

「大丈夫？」

入学式に向かう途中、まっさらな制服だというのにコケた私。追い抜きざまのことに、自分のせいかと思って助けてくれた、あの男の子。

海の青が好きな私が、彼の青い瞳に惹き込まれたのは、偶然ではなく必然だった。

「志保、しほほ！」

目の前でブンブンと下敷を振られ、我に返る。滅法気の強い友達、田中優奈だ。大人しくて、ともすると陰気だといじめられがちだった私を、中学生の時に庇ってくれたことがきっかけで仲良くなった。

「あ、ゴメン」

「ぼーっとすんなってば」

「うん」

この後は、英語の小テスト。一緒に単語リストを広げて暗唱していたというのに、私の番で止まっていた。

何故なら校庭には、体育のジャージ姿をしたジェシーくんがいたから。

どこにいても、すぐわかる。長身で、金髪で。

きらきら光る、海の瞳。

外見だけを好きになったのかと言われると、正直きつかけはそうだった。でも目に留まる彼は、いつもいつでも明るく笑い、男友達を大事にしている、騒ぐ女子に天狗にもならなければ疎ましげに追

い払ったりもしない。

声も爽やかで、隣のクラスだというのに、廊下越しに楽しげに喋る声が聞こえることもある。響きが、深い。帰宅方向が同じなこともあって、数メートル先を歩いている、なんてシチュエーションもたまにあるが、人の悪口や下卑な話をしていたこともない。

だから、どんどん好きになった。これは「外見だけで」とは、もう違うよね？

違うかもしれない。思い込みかもしれない。でも、それを訂正してもらえるほど、彼のことを知らない。知らないからこそ好きなのだし、知ってもっと好きになれるか興味を失うかなんて、片想い中に決めることなどではしない。

「やめな」

「え？」

「あんなの見るの」

「あんなの？」

「ジェシー」

どきん

「ご・ごめん」

「謝ることじゃないけど」

ツンと澄ましてしまった優奈。ジェシーくんとは昔、幼馴染みだったのだという。ただし、思春期の入り口に手の甲へのキスを受け、多感な怒りに火が点いたことがある……と、ただ再会が嬉しいなんて、単純な間柄ではないらしい。

いいじゃない。彼と幼馴染みなんて。手の甲にキスなんて……

脳内がアドレナリンで満たされて、私は無言で机に突っ伏した。

「何よ」

幼い優奈と自分を置き換えた妄想ストーリーが脳内で繰り広げられたのは、言うまでもない。そして、小テストの結果についても……

日に日に、私は感情を抑えきれなくなっていた。

廊下ですれ違つと、顔を伏せてしまふ。彼が数メートル行つてしまつてから、見えなくなるまで目で追つてしまふ。食事も喉を通らず、二キロ減量は嬉しい誤算。

「あのさあ。志保、ちよつとおかしいよ」

「な・なんで？」

「ぼんやりしすぎ、キラキラしすぎ」

「そんなこと、ない」

「ジェシーが好きなら、言えがいい。お勧めはしないけど、止めもしないよ」

そつぽを向いて紙パックの牛乳を飲み、優奈は空のそれを握り潰した。

「だつて……」

お昼休みの屋上ベンチ。私のサンドイッチは、たつたの一切れしか減らなかつた。胸が一杯で、どうにもならない。せつかくお母さんが作ってくれたそれに丁寧な蓋をして、手摺にもたれて風を受けた。

ああ、また。

どうしてこうも目立つのだろう？ 私が見てしまっただけ？ でも制服のままサッカーの真似ごとに興じているジェシーくんは、後ろで色めきだつて騒いでいる女子には気付いていない様子だ。

優奈が、隣に来た。

「どこがいいんだかね」

「優奈……」

ぐすん、と涙が出た。彼にとって、私はあの女の子たちと同じ。

彼女はいないみたいだけど、どちらにしても「その他大勢」から脱することなどではしない。

「ちょ・何泣いてんの？」

「辛いよ」

言葉にしたら、止まらなくなつた。しゃがみこんで、涙が落ちる

に任せ、他の生徒にチラチラ見られているのを知りながら、声もなく嗚咽するしかなかった。

「よしよし。まあ、志保が告白とか、全然無理だもんねえ」

「ジェシーくん、私の名前も知らないよ。見たことあるくらいに思っただけでたとしても、優奈と一緒にいる子、くらいの認識なんだもん」

ひつくひつくと子供泣きしてしまうと、優奈がガクンと頂垂れた。俯いたまま必死に考え、出した答に私は卒倒した。

「じゃ、私が伝えてあげるよ。気は進まないけど、他ならない志保の初恋だもんね。いきなりOKは無理でも、名前くらいは覚えてもらえるじゃない？　今より後ろへは進まないんだから。ね？」

嫌われたら、後ろへ進むよ……なんてどこかで思いながら、他に縋るものない私は、結局全部を優奈に投げ渡した。

だから、悪かったんだ。今ならそう思う。

絶望的な表情で戻ってきた優奈は、私のことを慮るというよりも、どちらかというと彼に対して怒っていた。

「好きか嫌いか答えられるほど、その子のこと知らないし。

彼は、そう言ったのだという。

もっともだった。私は彼を見ているのに、視線が合ったことなどない。要するに、彼が私を視界の隅にでも認めてくれたことなど、ないのだ。

でも私に肩入れしている優奈はそれを認めず、いつまでもツンツンとしていた。

「私さあ、こうしてジェシージェシーって呼び捨てしてるけど、一応久しぶりに話すからって、くん付けまでしちゃったんだよね。あーマジ、ありえない」

私は彼に、名前を覚えてもらえただろう。

告白までも友達任せの、問題外の女の子として。

泣いた。相当に泣いた。

一日は休んでしまっただけで、ショックはもとより、一晩泣き明かした顔があまりに酷かったからだ。

気持ちを解消するために、ノートに想いを書き連ねた。優奈ですらない、秘密の趣味だ。詩や作詞、短い小説を書くこともある。でもあの優奈にそれを知られたら、絶対に「読ませろ」という運びになり、断れない自信もある。

男子とまともに話すことのできない、臆病な私の妄想を読んだら、あの優奈でも倒れ伏すだろう。だから、言わないし読ませない。

これは私だけに許された、狭くて優しい世界。自虐だなんて、知ってるけれど。

一日たっぷり浸り込んで、翌日は重い身体を引き摺るように登校した。容赦なく、試験期間は近付いてくる。普段から頑張らないと、他の子のペースに付いていけない性格だ。痛手が残っているからこそ、真面目な振りして授業に出る方が楽だと思った。

「次、選択授業だね」

「うん。じゃね」

音楽コースと美術コースで分かれており、私は美術コース。音楽の優奈と教室前で別れ、画材を持って美術室に向かう。

本当は、あと一日休もうか散々悩んだ。何故なら、選択授業は三クラス合同となり、嫌でもジェシーくんと一緒に教室になるから。

私は勝手に意識して、ただの静物画だというのに、碌なデッサンもとれなかった。でも。

そんな気持ちは、完全に杞憂に終わってしまった。だって私は、一度も彼の視界に入れてもらえないことはなかったのだから。優奈と話した二日後の今日。さすがにこの無反応はキツかった。

まるで水槽の中で縄抜けに失敗した手品師だ。

勝手に意識して、雁字搦めに縛り上げて、全部空振りになっていく。見て欲しいのに見てもらえず、見られなければいいと思っているのに、本当に見てもらえなくて哀しくなっているなんて。

息が、できない。

私は美術室に最後に残り、ノロノロと画材を片付けた。睡眠不足やショックやらで、実際に身体がうまく動いてくれない。筆を洗うだけなのに、余計な場所に色水を飛ばしてしまうし、制服の袖を汚してしまうし、効率が悪い。

いいのだ。次は昼休みだから。優奈はわかってくれているし、屋上に向かえばきっと待っていてくれる。なんとかサブバッグに片付け終えた時。

ふと、誰かに見られていると思った。

黒板の横、憂いを含んだ男の彫像が、こちらをじっと見詰めている。

夕方以降ならばオカルトを想像して逃げ出すところだが、校庭からは騒ぐ男子生徒の歓声が聞こえるし、初夏の陽射しも燦々として妄想は掻き立てられる気配もない。ただ、私に何か囁いているように見えた。

「大丈夫？」

「シケた顔、してるなあ」

「最近、どうよ？」

「見ててやるから、頑張れよ」

その男の口から出そうな言葉を、呟いてみる。高みから叱責しそうな顔ともいえるし、訝しげに問う顔ともいえるし、静かな口調で諭し、励ます顔にも見える。

今の私には、最後の顔だと嬉しい。そんな想いで出た言葉たちだった。

「クスッ」

後ろで笑い声がして、飛び退いた。

開いたままの遠い扉から、男子生徒に覗かれていたのだ。羞恥という名の冷水を全身に被せられたような感覚で、口がわなわなとするばかり。顔が熱すぎて、これはもうリンゴのような色になるとい
ると、鏡を見なくても確信できてしまった。

「津田、志保ちゃんだよな」

「は・は・は・い」

どもり注意報、しどろもどろ警報発令中!!

男子生徒には、見覚えがある。

「俺、隣のクラスの国分元春」

ああ、そうだ。ジェシーくんの……

「ジェシーくんの、友達その一」

彼らは大抵三人で一緒にいるし、さつきも並んで座っていた。後ろから見ていたが、美術に興味がある訳でなく、落書き程度に遊び描きしていた人だ。

「あの……？」

もうとつくに片付けた国分くんが、戻ってくる理由がわからない。忘れ物かと教室を見回したが、何も置かれていない椅子の座面が、揃って昼の光を反射しているだけだった。

「志保ちゃんがいるの、見えたからさ。……それ、アグリッパっていうの知ってる？」

私の背後の男の顔を指差して、親しげに笑う。

いきなり下の名前で呼ばれてどぎまぎしたが、彫像にも興味が湧き、もう一度向き合ってみた。

「古代ローマの軍人で、カエサルになんとかかんとか、って、ジェシーが前に言ってたんだ。俺は興味ないから、碌に覚えちゃいないけど」

国分くんは暇そうにブラブラと寄ってきて、一緒にそれを見上げた。

「それを聞いてさ。どうして軍人の、しかもおっさんの顔が彫像の見本になってるんだって聞いたんだよな。そこまで知るもんかって、笑われた」

ジェシーくんが「そこまで知るもんか」と言う口調が想像できた。声も、表情も。キュンと胸が痛くなったが、むしろアグリッパの顔

を見上げることで我慢した。

国分くんはジェシーくんの友達だ。妙な言動を取れば、噂されかねない。って、どうせ眼中にないのは確認済みだけど、悪評までは耳に入れたくないから。

「でも、こうしてよく見ると、なぐんかわかるな」

国分君は、少し伸び気味の黒い癖っ毛を撫で付けて、鷹揚に笑った。

意図がわからず沈黙で返すと、彼は自分の考えにクスクスと笑いだした。

「いろいろ、話しそうじゃん？ 志保ちゃんがアテレコしてんの見て、俺もそう思った」

確かに、同じことをさっき思った。

「私もー励まされそうに、なった」

初めて、きちんと口を利いた自分に気が付いた。

「じゃあ、志保ちゃんが励まされたいってことだ、きっと」

「……うん、そうかも」

私は何かを見つけたくて、ずっとアグリッパの白い瞳を見続けた。高い棚に載せられている顔を注視するうち、首が痛くなりそうだった。

「俺も、アテレコしてみよっかな」

「？」

「俺は、そうだな。『この二人、なかなかいい雰囲気ではありませぬか？』だ」

「え？」

「それから……『叶わぬ恋よりも、新しい恋をしなさい』」

「国分くん？」

「『元春と呼ばれると、この男子は天にも昇るであろう』」

何が何やらわからぬ展開に、私は初めて身体ごと、国分くんの方を向こうとした。

「そんなに、ジェシーがいい？」

ふざけたアグリッパのアテレコではない、地の柔らかな声になつて。

向き直る一瞬の間に、彼は両手を棚に掛け、私のことを納めていた。

触れそうで触れない距離感に、サブバッグで身を守るように抱きかかえた。

「いつも、あいつを見てるよね」

首を傾げて覗こうとしてくるけれど、私は顔を見れずに俯いていた。強引に触れようという意思を感じたら、きつと叫んでいただろう。

でも不思議と、そういう怖い感じはしなかった。

「君の視界に、俺はいた？」

問い掛ける息が、私の髪を揺らす。不快感に襲われたなら、きつと叫んでいただろう。

でも不思議と、そういう気持ち悪さは感じなかった。

「俺にしなよ」

「で・で・でも、あの、わ・私」

「わかつてる。でもジェシーって、結構冷たいトコあるぜ？ あんなにたくさんの女子に騒がれてもシレッとしてるし、告白されてもドライにすっぱり断るし。志保ちゃんがいくら見てたって、見るだけじゃー」

「し・知ってる」

喉が狭くなった。息をするのもやつとなのに、接近しすぎて、顔の前の空気がこもるほどで。

動揺と、苦しさ、悔しさと。

いろんな意味で、クラクラしてきた。

「知ってるなら」

「私、別に。見てるだけでも、いいから」

絞り出した声がどんどん震え始めて、制御できなくなっていた。「だから。だから……」

言葉なんて続かない。春からこっち、マラソンみたいに片想いし続けて、妄想ばかりし続けて。ジェシーくんをちゃんと見ていたのか、理想を混ぜて捏造していたのかだって、わからない。

「仕方ないの。男の子に話しかけるなんて、できないから。ずっと、見てるだけでも、しかたな……」

ボロボロと涙が零れたのは、今の会話だけの問題じゃない。一昨日からずっと泣き通しで、涙腺が壊れ気味だから。でも国分くんは十分に狼狽して、さすがにまずったという気配で、私を解放した。「ごめん」

私は何も言えず、走って逃げた。トイレに逃げ込んでから、サブバッグを落としたことに気付いたけれど、どうでもよかった。あんなものをどうこうする人なんていない。国分くんも、きっとその場に置いて帰るだろう。

何も言えずに、ただ逃げた。変な女子。きっとそう思われたから。

優奈には、後からたっぷりと叱られた。といっても冗談混じりにしてくれたけど。

私はショックがどうしても醒めず、教室で通学鞆だけ掴み、黙って帰宅してしまった。優奈が担任に、体調不良で帰ったとフォローしてくれたらしいが、私はそんな電話口に「ごめん」と泣いた。

詳しく事情は聞かれなかった。きつと一昨日のショックが長引いていると思われたのだろう。国分くんのことをどう説明したらいいかわからなかったから、追及されなくて助かった。あの友人が「志保になんてことするの！」なんて怒鳴りこみかねない性格なのは、他でもない私がよく知っている。

ジェシーくんを、見るだけしかできない。

でも、それすら酷い迷惑だったら？　いつまでもジツトリと視線を絡める、変な女だと思われたら？

こんな段階でも、まだどう思われるか心配してる、どうしようもない自分。

全部、蹴りをつけてしまいたい。

私は、数回だけアクセスしたことがある、学校裏サイトに接続した。暴言などがあるのも承知だけど、他に手段が思い付かなかった。私にとっては、最後の賭け。私が書いたとわからなくてもいい。むしろ、わからない方がいい。でももしかしたら、反応してくれるかもしれない。それが冷たかったら、きっと国分くんが言った通り、どこかドライな人なのだろう。

もし私だけでなく、他に見ている女子たちに対してでも、目を留めて許してあげる顔をしてくれたら。

その時こそ、私は直接、告白しよう。そうでないと、終われないから。

「私の事を知らない貴方へ

貴方はきっと、私の名前も知らないでしょう。

それでも、私は貴方のことを見つめています。

貴方の、綺麗な青い瞳が好きです。とても透明で、まるで海の色。

貴方の、声が好きです。貴方の仕草のひとつひとつが好きです。

何より、他のお友達に向けられる貴方の笑顔が、大好きです。

私の事を知らない貴方へ

私は貴方の笑顔を見られるだけで、本当に幸せなんです

こんな私が、あなたを見つめる事だけは、許してください」

少しの嘘を混ぜることを、許してください。

名前も知らない、というのは、少し前の私のこと。優奈が名前を教えたのだから、まったく知らないというのは語弊があるよね？もしかしたら、知らなかったと同じくらい、忘れられているかもしれないけれど。

見られるだけで幸せ、というのも、ちょっとだけ嘘。それが嘘だと教えてくれたのは、あなたのお友達その一である、国分くんだけだ。

思い切ってそんな書き込みをできたのは、きっと深夜のテンションだったからだろう。後にどうなるかなんて、想像もせず。

相変わらずどんよりとした気分で、私は電車を降りた。大体優奈と同じ電車に乗るが、今朝は彼女が朝練のある曜日。優奈以外にとりたてて親しい友達のいない私は、独りの方が気が楽で。

「志保ちゃん」

ぎよつと立ち竦み、踵を返そうとする。

「どこ行くの、遅刻するよ」

国分くんが、自転車で駅前にいた。同じグループの友達でしたっけ？ と聞きたくなるほどの人懐っこい顔をして、自転車を手押しして走ってきた。

「昨日は、ごめん」

「あーううん」

「これ」

自転車の前かごにあるサブバッグを示され、届けてくれたことがわかった。学校でも構わないのに、と思いながら手を伸ばすと、彼はすいすいと学校に向けて歩き出した。

一緒に行こうという意思が感じられて、どうしたらいいか迷いながらも足を踏み出した。

昨日のことは、昨日のこと。顔を見ても、あれがなんだか嘘だったかのような気がしてくる。それくらい、国分くんは明るい顔をしていたから。

「あの、バッグ、ありがとう」

「ああ、いや。俺のせいだから」

さすがに言いにくそうな口調になり、彼は頭を掻いて話し始めた。
「あのさ……本当に、好きなんだね」

無言でこくり、と頷いた。他の言葉は、特に必要に感じなかった。
「でも、俺が言ったのも本当。俺は別に、あんなイケメンじゃないけど」

そうだろうか？ 普通に、格好いい部類だと思うけど。確かに別格のジェシーさんと一緒に行動していたら、自己評価もダウンしてしまうのかも。

でも、それを口に出すことはできなかった。恥ずかしいのも勿論だし、なんだか激しく勘違いさせてしまいそうな気がしたからだ。

「私だって」

「うん？」

「私だって、思ったより暗いかもしれないし、人に言えない、おかしな趣味があるかもしれない。国分くんは、私のこと誤解してる」

「そんなモンじゃん？ 全部知ってからなんて、恋できないよ」

あからさまな言葉に、愕然とした。

「だから、志保ちゃんがジェシーを理由なく好きでも、俺は否定する気ないよ。そこは訂正しておこうと思った」

「うん……」

ずっと、肩の荷が下りた気がした。その場ではただショックだったんだけど、やっと理由がわかった。国分くんの昨日の言葉は、ジェシーくんへの気持ちを目の前から突き返されたみたいだったのだ。

「あと、もう一つ二つ。俺は、志保ちゃんが可愛いと思ってる。男の子に話しかけられないなんて、奥ゆかしい。軟派と思われてそうだけど、かなりマジ」

「奥ゆかしいから、話せないんじゃないの。やっぱり誤解してる」
「でも気付いてる？」

「？」

国分くんは、めっちゃめっちゃ得意げに、親指で自分を指差した。
「俺とは、ちゃんと話してる」

きつと私は、ものすごく赤くなっていただろう。

まだ、何の結果も出せないけれど。
とりあえず妄想のノートは、読み返さずに捨ててしまおうと思った。

（後書き）

書いてから、もしかして裏サイトの書き込みを志保にするのはまづかったか？と悩んでしまいました。でも中園詩がジェシーに興味なくて、優奈は書き手がいないので、もう志保が引き受けるしかないだろう、と決意した次第です。

この後日、志保は裏サイトの炎上を知って後悔するんだろうなあ、と思うと可哀想ですが。

元春くんが、美術室の話の後に、ジェシーに「あの子じゃん？」などと軽く指摘してしまっています。その点だけがどうしても矛盾気味になってしまいました。

志保への気持ち軟派癖だからなのか、マジだからこそ、まだ友達に隠しているのか。

工藤流優空先生、その辺、うまく処理していただけると……大変、助かります（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3568h/>

私の事を知らないあなたへ—津田志保視点

2010年10月8日15時33分発行